

レスコフの目に映ったシェフチェンコ ——レスコフ「シェフチェンコとの最後の出会い、最後の別れ」翻訳に寄せて——

深瀧 雄太¹

はじめに

本稿は、19世紀ロシアの作家ニコライ・レスコフ(Николай Семенович Лесков, 1831-1895)²が、ウクライナ詩人タラス・シェフチェンコ(Тарас Григорьевич Шевченко, 1814-1861)の死に寄せて書いた追悼文を翻訳したものであり、以下のように構成される。

- 1 翻訳
- 2 略年譜(シェフチェンコおよびレスコフ)
- 3 解題
- 4 付録。本稿で言及する、アレクセイ・プレシチエーエフ(Алексей Николаевич Плещеев, 1825-1893)およびニコライ・ネクラースフ(Николай Алексеевич Некрасов, 1821-1877)の詩の全訳。

「1. 翻訳」に関して、あらかじめ数点補足する。

(1)底本および出典の表記方法について。本稿では、底本として『レスコフ 11 卷著作集』³を用いた。本著作集からの出典を示す際、角括弧([…])を用いて、巻と頁をコロンを挟んでこの順で、いずれもアラビア数字で表記する。例えば、[10: 485]とある場合、『レスコフ 11 卷著作集』のうち「10 巻の 485 頁」を参照したことを意味する。

(2)その他、略語を用いた出典の凡例について。訳文の脚注欄では、『レスコフ 11 卷著作集』のほか、いくつかの全集や辞典類、書籍が頻繁に参照される。それらの出典を示す場合、以下の略語を用いる。

- ・ПССЛ……『レスコフ 30 卷全集』⁴ (Полное Собрание Сочинений Лескова)の略。
- ・КЛЭ……『文学小辞典』⁵ (Краткая Литературная Энциклопедия)の略。
- ・ШЕ……『シェフチェンコ辞典』⁶ (Шевченківська Енциклопедія)の略。
- ・БД……ソ連期に活躍した文学研究者ベレツキー(А. Белецкий)およびデイチ(А. Дейч)の略。⁶

¹ 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けた。

² Лесков Н. С. Собрание сочинений в 11 томах. М.: ГИХЛ, 1956-1968.

³ Лесков Н. С. Полное собрание сочинений в 30 томах. М.: Терра, 1996-.

⁴ Гл. ред. А. А. Сурков. Краткая литературная энциклопедия. М.: Советская энциклопедия, 1962-1978.

⁵ Редакційна колегія М. Г. Жулинський М тощо. Шевченківська енциклопедія: в 6 томах. Київ: Національна Академія Наук України, Інститут літератури ім. Т. Г. Шевченка, 2013-2015.

⁶ Белецкий А., Дейч А. Жизнь и творчество Т. Г. Шевченко // Шевченко Т. Собрание сочинений в 5 томах. Т. 1. М.:

・藤井……藤井悦子訳『シェフチェンコ詩集 コブザール』を指す。

以上を典拠とする場合、略語を用いた上で、『レスコフ 11 巻著作集』と同様の規則で出典を示す。したがって、例えば[ИССЛ 1: 717]とある場合、『レスコフ 30 巻全集』のうち「1 巻の 717 頁」を参照したことを意味する。ただし、『シェフチェンコ詩集 コブザール』、またベレツキーとデイチによるシェフチェンコ概論については、頁番号のみを記す。

(3) 翻訳方針について。原文の表現や文構造に可能な限り忠実な訳文を心掛けた。ただし、日本語としての読みやすさを重視するため、原文における一文を、複数の文に分割して訳出した箇所がある。また、文意を明確にする目的で、明らかに原文にない単語を補う場合には、その箇所を角括弧([…])を用いて示した。

(4) 謝辞。翻訳した文章は基本的にロシア語で構成されているが、部分的にウクライナ語を含む表現が見られる。ウクライナ語の語彙や表現を含む箇所の訳出については、ウクライナ語圏の言語接触について研究している池澤匠氏(東京大学大学院)からの助言を得た。記して感謝したい。もちろん、訳文全体の責任は筆者が負うものである。

ГИХЛ, 1955. С. 7-94.

⁷ タラス・シェフチェンコ／藤井悦子訳『シェフチェンコ詩集 コブザール』群像社、2018 年。本稿では藤井によるシェフチェンコの生涯についての解説([藤井 300-337])をたびたび参照している。

【1. 翻訳】

レスコフ「シェフチェンコとの最後の出会い、最後の別れ」⁸

彼は決してボール遊びを好まなかった
 彼その人が小さなボールで、運命がそれをもてあそんだ
 アレクセイ・プレシチェーフ⁹

かくして、小ロシアの豎琴[リラ]は孤児となった。¹⁰ その弾き手たる息絶えた詩人は、棺に横たわっている。タラス・グリゴリーエヴィチ・シェフチェンコが逝ってしまった。棺は今日、別れの言葉と同

⁸ *Лесков Н. С. Последняя встреча и разлука с Шевченко*. [10: 7-12] 1861年3月9日発行の新聞「ロシアの言葉」(Русская речь)誌、第19-20号に掲載された。[10: 485] 底本と典典の表記規則については、本稿「はじめに」を参照されたい。

⁹ エピグラフに掲げられているのは、オーストリア＝ハンガリーの詩人カール・ベック(Karl Beck, 1817-1879)の詩「下男と女中」(Knecht und Magd, 1846 / Слуга и служанка, перевод 1861)の一節である。これは、1861年ロシアの詩人プレシチェーフによってロシア語に翻訳された。レスコフはこのプレシチェーフ訳を参照しており、そのために出典には彼の名が付けられている。注釈によれば、レスコフの引用は正確ではない。[10: 485] 実際、プレシチェーフ版第1巻1行目では、「孤児」(сирота)という単語が使われているのに対し、レスコフはこれを単に「彼」(он)としている。この差異が、かみこして生じたのか、すなわち、レスコフの記憶違いによるものなのか、あるいは意図的な改変なのかは、今のところわかっていない。後者であるとするれば、レスコフは、「孤児」という具体的な設定を避け、漠然と「彼」とすることで、読者に、その指示対象の具体例として、シェフチェンコを想起させようとしたと考えられる。言い換えれば、レスコフはこの一節を、シェフチェンコの生涯を暗示するものとして適切だと判断し、またその判断に基づき、若干の修正を加えて引用したのではないだろうか。プレシチェーフ版の詩全体は、農奴身分と思われる男女の生涯を主題としたものである。孤児であった男児は、幼くして労働に従事して飢えや寒さを耐え忍び、やがて従僕としてどこかの主人の屋敷に仕える。彼は、おそらくはそこで働いていたであろう女中に恋をし、最終的に二人は共につましくも幸福な生活を送る。二人を結び付ける愛が、世俗的な性愛から、宗教的な感觸を伴うものへ昇華していくことを予感させながら、詩は結ばれる。プレシチェーフ版はおよそ以上のような、物語的内容を持つ詩である。この詩とシェフチェンコとの共通点として、農奴出身であった点、孤児となり、重労働を行ったことなどが挙げられる。本稿末にプレシチェーフ版「下男と女中」の全訳を付けているので、適宜参照されたい。

なお、プレシチェーフとシェフチェンコは個人的に面識があり、書翰のやり取りもしていたことが知られている。[BD 78] レスコフは、このような両者の関係も念頭に置き、プレシチェーフの詩を取り上げたのかもしれない。プレシチェーフは、シェフチェンコの複数の詩をウクライナ語からロシア語に翻訳していることでも知られている。ただし、概してプレシチェーフの翻訳は自由訳であった。[КЛТЭ 5: 799] (出典の略語(BD および КЛТЭ)については、本稿「はじめに」を参照されたい)。例えば、プレシチェーフはシェフチェンコの詩「思索」(Минають дні, минають ночі / Дума)と「夢」(Сон. Марку Вовчку / Сон)を1858年に、また物語詩「労働する女」(Наймичка / Работница)を1861年に翻訳している(括弧内の前者は原題、後者はロシア語訳の題)。例示した詩のうち、「思索」と「夢」は Плещеева А. Н. Полное собрание стихотворений. М.: Советский писатель, 1964. С. 271-272 に、また「労働する女」は Стихотворения А. Н. Плещеева. М.: Типография В. Грачева и Комп., 1861. С. 34-52 にそれぞれ収められている。

¹⁰ 訳文の通り、本文は「かくして」(Итак)から始まる。唐突な印象を与えるこの冒頭の表現は、「シェフチェンコの死がペテルブルグの知識人にとって周知のことであり、シェフチェンコその人についても改めて詳細に説明する必要がない」というレスコフの認識を伝えている。実際、続く文章でレスコフは、シェフチェンコの文学史的意義について改めて語るまでもないことを認めた上で、個人的な経験と印象に焦点を当てて、シェフチェンコについて語るつもりであると述べている。

胸に寄せる涙に見送られて、スモレンスク墓地の湿った墓へと運ばれていった。小ロシア文学の勃興期、故詩人が全身全霊をかけて共感を寄せた雑誌『オスノーヴァ[いしずえ]』¹¹の誕生日において、この喪失が小ロシア文学にとり、いかに大きなものだったのか、私からは語るまい。シェフチェンコの意蘊こつについては、血を分けたスラヴの言葉を愛し、何か高次のもの、優れたものに触れてこられた者たちなら、誰でも知っている——それでも私は、故詩人との最後の出会い、そして墓場で最後の別れが残した印象を『ロシアの言葉』の読者たちと分かち合える喜びを、認めないわけにはいかない。

ペテルブルグで出回っている新聞記事を通じて、シェフチェンコがすでに昨秋から病気がちであり、今年の1月末にはもうほとんど芸術アカデミーの建物の中にある自分の住居¹²を出ていなかったということは、すでに誰もが知っていることと思う。彼がペテルブルグへ戻ってから¹³割り当てられたこの住居は、1つの大変狭い部屋からなっていた。部屋には窓が1つ付いており、画家としてのシェフチェンコは、いつも窓の前でイーゼルに向かい、絵を描いていた。本と版画を載せたテーブル、イーゼル、シンプルなまだら模様があしらわれた防水布加工の小さなソファ、たいへん簡素な椅子が2つに、画家の工房と入り口を分かちつみすばらしい仕切りのほか、この部屋には装飾品がまったくなかった。

仕切りの向こうの狭いドアは、やはり狭い螺旋階段を経て、中二階へと通じており、この中二階は、階下と同様、床にまで達する正方形の窓を1つ備えた部屋で構成されていた。ここには、詩人としてのシェフチェンコの寝台と書斎があった。この部屋の調度品はなお一層むづかかった。右隅に

¹¹ 1861年から1862年にかけて、社会活動家、ジャーナリストのヴァシーリー・ペロゼールスキー(Василь Михайлович Белозерский = Василь Михайлович Білозерський, 1825-1899)のもと、ペテルブルグで刊行されていたロシア語およびウクライナ語の雑誌。[10: 485] [ПССЛ1: 717] これは月刊誌であり、雑誌の眼目は、文学・言語・エスノグラフィ・フォーク・歴史などの「ウクライナの民族文化の発展」と、「ウクライナ語こよる啓蒙」にあった。ニコライ・チェルヌイシェフスキー(Николай Гаврилович Чернышевский, 1828-1889)を筆頭とするロシアの革命的民主主義者は、本雑誌の進歩的側面を支持する一方、個々の主張における「保守主義」と「民族的限界性」の出現については批判的であった。[КІД 5: 483] この雑誌の2月号において、シェフチェンコの死が伝えられるとともに、彼の遺物の保存と収集が読者に呼びかけられた。[ПССЛ1: 717] 出典の略語(ПССЛ)については、本稿「はじめに」を参照されたい。

¹² シェフチェンコは1838年から1845年までの間、芸術アカデミーで絵画を学んでいた。その後、流刑などの期間を挟み、再び芸術アカデミーに部屋を与えられた。農奴であったシェフチェンコは、幼いころから画家になることを望んでいた。1831年、シェフチェンコは、当時仕えていた地主エンゲリガルトに連れられてヴィリノ(ヴィリニウス)からペテルブルグへと移る。シェフチェンコの絵に対する情熱を消し去ることはできないと悟ったエンゲリガルトは、シェフチェンコを自分の「室内画家」とすることに決め、1832年、装飾画家シリャーエフのもとへ4年間の徒弟奉公に出した。芸術家・文化人たち(ウクライナ出身のアカデミー学生イヴァン・ゾジェンコ、画家カール・ブリュローフ、詩人ヴァシーリー・ジュコフスキーなど)は、シェフチェンコの才能を認め、そのうちの幾人かは、シェフチェンコの身分を解放するために、絵の競売を行い、資金を調達した。こうした周辺者の尽力により、シェフチェンコは自由身分となり、芸術アカデミーの学生となった。以上の記述は、[藤井 304-308]および[БД 15-17]に基づく。出典の略語(藤井)については、本稿「はじめに」を参照されたい。

¹³ シェフチェンコは、流刑ののち、1858年3月27日にペテルブルグへと帰還した。[10: 485]

は、シェフチェンコがいつも執筆の際に使用していた小さなテーブルあった。それから、非常に簡素な寝具を備えたベッド、またその足元には、別の、まったく簡素な小テーブルがあるばかりで、そこにはたいい水を入れたカラフェ、手洗い桶、そしてさきやかなティーセットが置いてあった。

1年ほど私はベテルブルグを離れていたが、1月末に北方のパルミラ¹⁴へと戻るや、詩人に挨拶すべく、すぐに出発した。ドアのあたりで私は、いつも詩人の世話をしていた兵士に出くわした。「タラス・グリゴリーエヴィチはご在宅ですか」。私は彼に尋ねた。「おりません」と使用人は答えた。「今朝早くに、もう家を出ていかれました」。私は、しかし、[芸術アカデミーの]建物で彼に会えなかったときいつもやるように、開き戸の隙間に来訪カードを置こうと思って、詩人のドアの方のほうに近寄ってみた。ところが、まったく驚いたことに、私がそっと触れるとドアが開いたのである。画家が工房として使用していた部屋には誰もいなかった。だが、上には行きたくなかった。詩人を煩わせるのではないかと思ったのだ。私がオーバーシューズを履きはじめたそのときだった。「どなたですか？」——そう上から声が聞こえてきたのだ。シェフチェンコの声だとわかり、私は自分の姓を名乗った。「ああ……、親愛なる方、こちらに来てください」とタラス・グリゴリーエヴィチは答えた。中に入り、詩人を見た。茶色の、しかし裏地は赤色の小ロシアの上着を身に着け、窓に対して横向きに腰掛けていた。彼の前には薬を入れた瓶と、飲みかけのお茶があった。「こんな風にお迎えすること、どうぞお許してください。下に降りられないんですよ。ちくしょう、この床が邪魔くさいっつらない。まあお掛けくださいな」。私は何も言わず、テーブルのそばに腰を掛けた。この時のシェフチェンコは、何か奇妙な様子だった。私たちは二人とも黙っていたが、彼の方がこの沈黙を打ち切った。「ご覧の通りの死にかけです」と彼は言った。「見てください、私がどんなに怠け者になってしまったことか」。私は一層目を凝らして見つめはじめた。そして、実際に彼の全身には何か恐ろしいほどに病的なものがあるとわかった。けれども私は、彼の顔のうちに、間近に死が訪れるような兆しはいささかも見て取ることができなかった。彼は胸の痛みとひどい息苦しさを嘆いた。「もう終わりでしょう」——そう結ぶと、シェフチェンコはたったいま薬を飲むのに使ったスプーンをテーブルに放り投げた。私は、こういう場合によく使われる警句を持ち出して、彼をなだめようと試みた。そうではあるがしかし、無数の衝撃的な出来事を耐え抜いた、詩人の力強い本性が、病に屈することはないだろうと私は深く信じていた。病むということの恐ろしい意味を私は理解していなかったのである。「ああ、私の話はもうたくさんです」と詩人は言った。「それより、ウクライナであった良い知らせについて、私にお話しして下さる方がよろしい」。

私は彼の知人たちがよろしく言っていた旨を伝えた。シェフチェンコはそこで出た知人一人ひと

¹⁴ ロシア帝国の首都サンクト・ペテルブルグの別称。石造りの整然とした都市ベテルブルグを古代の美都とされるパルミラになぞらえた表現。

りについて私に尋ねた。また彼は、最後のキエフ訪問時、¹⁵ イヴァン・ヴァシーリエヴィチ・グドフスキーのところ滞りたのだが、この病気の芸術家のことでひどく心を痛めていた。小ロシアのことを、またウクライナ人の知人のことを話している間、詩人は見るからに活気づいていた。病的ないら立ちは少しずつ彼のもとを去り、ある場合には、彼の作品にも息づいていた、温かくて生命力に満ちた愛の感情へと転化した。また別の場合には、最も激烈な憤りへと転化していった。彼はそれのできる限りは抑えようとしていたのだが。

シェフチェンコの前にあったテーブルには、彼が書き上げた小ロシア語の初等教科書¹⁶の山が二つあった。また彼の手の下には、別の『小ロシア語入門』（малороссийская грамотка）¹⁷があった。彼はそれを何度か開き、テーブルの上に放り投げ、そしてまた開いては放り投げるのだった。どうも、その小さな本が彼の意識をかなり占め、かなりいらいらさせているようだった。私は、帽子を手に取りろうとした。詩人は私の手を引き、座らせた。「ねえほら、あなたはこの小さな本のことをご存じですか？」彼は私に『入門』を見せた。知っているかと私は答えた。「その、もしご存じでしたら、誰のために書かれたものなのか、私に教えてくださいませんか。」「誰のため、という？」私は質問に対し、別の質問で答えた。「ですから、誰のためなのか、です。というのも、私にはこれが誰のために書かれたものなのか、わからないのです。理性[の働かせ方]を教えねばならない（треба навчить разуму）

¹⁵ シェフチェンコが最後にウクライナを訪れたのは、1859年である。[10: 485] シェフチェンコは、1831年からペテルブルグに移り、以後この首都を生活の拠点とするが、1843年と1845年、そして1859年の計3回ウクライナを訪問している。本稿「2.1. シェフチェンコ略年譜」も参照されたい。

¹⁶ 念頭にあるのは、ペテルブルグで出版された『南ロシアの初等教科書』（Букварь южнорусский, 1861）。シェフチェンコが日曜学校で読み書きを教える教本として作成した。このあと本文でも言及されるパンтелейモン・クリーシュ（Пантелеймон Александрович Кулиш = Пантелеймон Олександрович Куліш, 1819-1897）著『入門』（これに相当するロシア語の発音と表記は「グラマトカ Грамотка」だが、ウクライナ語だと「フラマトカ Граматка」となる）が、1冊50コペイカ（10シャープ）であったのに対し、シェフチェンコの初等教科書は30コペイカ（6シャープ）と相対的に安価であった。[ШЕ 1: 526] 辞典の略語(ШЕ)については、本稿「はじめに」を参照されたい。また、クリーシュの経歴についてはのちの脚注で詳述した。

ところで、レスコフは1860年6月に発表した記事の中で、キエフのステパン・リトフ書店が宗務庁版ロシア語福音書を定価20コペイカのところ、その2倍の値段(40コペイカ)で販売していることを報道した。この記事が反響を呼んだ結果、リトフ書店での福音書販売が停止したほか、キエフのバルシェフスキー書店が25コペイカ(定価に郵送料を加えた価格)で福音書を販売するに至った(以上に記したキエフでの福音書販売の価格をめぐるレスコフの評論活動については、次の論考を参照した。岩浅武久「レスコフの初期社会評論: 文筆活動への出発」『言語文化』、一橋大学言語学研究室、22号、1985年、53-54頁)。このように見ると、1冊50コペイカで販売されたクリーシュの『入門』はやや高価といえる。シェフチェンコが価格の点で『入門』に否定的な感情を抱いた可能性は否定できない。本文中、シェフチェンコは「『入門』が『誰のために書かれたものなのか』とレスコフに問う。その言葉は、一つには、価格の点で入手しづらく、教育が必要な層に届かない可能性がある入門書への、不満の表れだったのかもしれない。

¹⁷ クリーシュが著したウクライナ語の初等教科書のこと。レスコフは「小ロシア語の」と付記しているが、出版時の標題紙にはこの語は無く、単に『入門』（Граматка）となっている。[ШЕ 3: 635] 本書は、初めに1857年にペテルブルグで刊行され、のち1861年に再度出版された。シェフチェンコは、この参考書に対して否定的な態度をとっていた。[10: 485] 『シェフチェンコ百科事典』によると、シェフチェンコは1857年12月10日の日記に、興奮冷めやらぬ様子で次のように書き記した。「これは、司祭たちによって押さえつけられた奴隷の頭こも入り込める、初めてでの自由の光線だ」。このように、彼は当初『入門』を高く評価したが、のちにその内容を精査した結果、これに幻滅し、自分の教科書『南ロシアの初等教科書』の編集に取り掛かった。[ШЕ 3: 635]

人のために書かれたものでないことはわかるのですが」。私は回答を回避しようと努め、日曜学校のことを話題にした。だが、詩人は私の話には耳を貸さず、見たところ、『入門』のことを考えていた。

「まったく、春までもてばいいんだけどなあ！」彼は長いことあれこれ考えたのち、言った。「それでウクライナへ……。そこなら多分、ちょっとは楽になるでしょう。多分、ほんの少しぐらいは、息がしやすくなるでしょう」。私は耐えがたい気持ちになっていた。涙が流れるのを感じた。彼は私に、ワルシャワ鉄道とキエフ街道のことをあれこれ尋ねた。シェフチェンコは言った。「それはいい！ 駅馬車をもっと速ければねえ。この忌まわしい駅馬車では生きてたどり着けたもんじゃない。だが行かぬば。もしここに留まったら、私は絶対に死んでしまうでしょうから」。

私は別れを告げた。「ありがとう、気にかけてくれて」詩人はそう言って、立ち上がった。「そうだ」と彼は、自分の初等教科書を私に差し出しながら、付け加えた。「これを見て、どう思うかおっしゃってください」。その言葉とともに、彼は私に本を差し出した。そうして私たちは別れた……。今生、永遠に。私はもう生きてシェフチェンコに会うことはなかった。2月26日の彼の死の知らせに私は衝撃を受けた。雷鳴の一撃のようだった。2月27日の朝、私はもう一人の同郷人であり、故人の知り合いであるニチポレンコ¹⁸とともに、アカデミーへ向かった。シェフチェンコの[住居の]ドアは閉じられ、封鎖されていた。私たちは[事態を]察して、アカデミーの教会へ行った。教会の拝廊には、白い棺の蓋が立ててあった。説教壇の前の黒い霊柩馬車の上に、白地の錦を打ち付けた棺が見えた。枕元で、小柄な人がとてもゆっくり、とても静かに読経していた。私は思い出した。一年前、詩人が自分で小ロシア語に翻訳した詩編¹⁹の出版に奔走していたことを。いつも不安そうな様子で、アレクサンドル・ネフスキー修道院からヴァシーリー島に至る道を通して、私のところに来ていたことを。いま、シェフチェンコが翻訳した詩編の一つが、彼のために読まれていた。棺の向かい側にある教会の窓は、赤いカーテンが下され、赤みがかった光を死者の穏やかな顔に投げかけていた。その顔には、彼を生涯見放さなかった高潔な思索の跡が留められていた。紙と鉛筆を持った三人の画家が棺の左側に立ち、絵を描いていた。ペテルブルグの炊事婦が何かを運れた二人の女性は、ホホールたち(хохлы)²⁰の中にも賢い人間はいるもので、故人はまさに少佐の位に就いて勤めていたが、彼の兄弟たちはまだ「地主のもの」であるなどと論じたてていた。私はフリルコフスキー氏

¹⁸ アンドレイ・ニチポレンコ(Андрей Иванович Ничипоренко, 1837-1863)。60年代の革命運動の参加者であり、結社「土地と意志」(Земля и воля)の一員。

¹⁹ シェフチェンコは11歳で孤児になると、やがて輔祭ボロフスキーのもとで、鞭を打たれながら教育を受け、さらに下男として重労働をこなした。この間にシェフチェンコは、本文で言及されている詩編、また教会スラヴ語の基礎知識を身に着けたと思われる。[藤井 305] [БД14]

²⁰ ウクライナ人(украинец, малоросс)のこと。原義は「とさか、頭髮の突き出た部分」であり、前髪を一部だけ残すウクライナ人の伝統的な髪型を指した。ここから転じて、「ウクライナ人」の意味を持つようになった。ヴラジーミル・ダーリ(Владимир Иванович Даль, 1801-1872)の辞書(Толковый словарь живого великорусского языка, 1863-1866)にもこの二つの意味が掲載されている。

21 のことを思い出した。死んだ詩人の家族的な[所有者だった]地主である……。きれいな色の軍服を着た騎兵らしき人が、シューズの拍車とサーベルをカチャカチャ鳴らしながら駆け込んできた。しかし、教会を数歩進んだところで、サーベルを手に持ち、また靴のかかとを少し持ち上げてから、つま先立ちで歩いて行った。こうして、武具によって引き起こされる騒音がすっかり止んだ。教会に再び敬虔な静寂が訪れた。小ロシアの詩人のために、聖書に描かれた詩人にして王²²の悲嘆を読み上げていた、小柄な男性の弱々しい声だけが響いていた。

2月28日、アカデミーの教会で神の僕タラスの冥福を祈る聖体礼儀が済み、教会のしきたりに則って教会葬が終わったあと、故人の近親者は弔辞を述べて冥福を祈った。私が間違っていないければ、寄せられたスピーチは全部で9つあり、²³ その内の7つは教会で、2つは墓地で読み上げられ

21 本文中では「フリルコフスキー」(Флирковский)となっているが、これは誤植であり、正しくは「(ヴァレリー・)フリオルコフスキー」(Валерий Эразмович Филорковский = Валерий Кразмович Филорковский, 生没年不詳)。シェフチェンコの弟妹(オシプとニキータ、およびイリーナ)が、農奴としてフリオルコフスキーの管理下に置かれていた。1860年6月にフリオルコフスキーは、彼らを土地なしで自由身分にすることに同意した。[10: 486] [ПССЛ1: 718] [ШЕ 6: 525-526]

22 ダビデ王のこと。[10: 486]

23 『レスコフ 11 巻著作集』および『レスコフ 30 巻全集』の注釈によれば、弔辞を述べた者として、以下の人物が知られている。[10: 486] [ПССЛ1: 718] [1] クリーシュ、ウクライナ語作家、学者。秘密結社「キリロ・メフォディウス同胞団」(Кирилло-Мефодиевское братство)に参加したと言われている。この結社は、農奴制の廃止と全スラヴ人の連合を目的に、後述するコストマーロフらによって組織されたもので、シェフチェンコもこれに接近した。やがて結社はロシア政府の弾圧を受け、関係者と見なされた者たちは逮捕・流刑になっている。シェフチェンコも、一兵卒としてオレンブルグ(ウラル山脈南西部に位置するステップ地帯)へ送られた。[藤井 316-317] クリーシュもまた逮捕され、初めはヴォログダへの流刑を科されたが、のちに改悔の態度を示してツァーリ政府の恩赦を得、1850年にはベテルブルグへ移った。初めは自由主義者として活動していたが、70年代以降は保守反動的な立場を取った。そのため、19世紀ウクライナ文学史においては、反民主主義的、反社会主義的な傾向を持つ人物として位置付けられている。[КЛЭ 3: 887-889] [2] ニコライ・コストマーロフ(Николай Иванович Костомаров = Микола Іванович Костомаров, 1817-1885)、ウクライナ語、ロシア語の著述家。社会評論家、歴史家、批評家、作家など多面的な活躍。ロシア人地主の家庭に生まれる。母親が農奴出身のウクライナ人。1837年、ハルキウ(ハリコフ)大学を卒業。1844年、修士論文「ロシア民衆詩の歴史的意義について」(Об историческом значении русской народной поэзии)を提出し、学位を得る。1846年より、キエフ大学歴史学部の教授職に就く。思想的同胞と共に、キエフで秘密組織「キリロ・メフォディウス同胞団」を組織するが、ツァーリ政府の弾圧を受け解体。コストマーロフは、サラトフへの流刑を科される。1856年に恩赦を得、1859年から62年、ベテルブルグ大学で教授職に就く。同大学での講義や、『同時代人』や『祖国雑誌』など進歩派の雑誌に掲載した論文などにより、広く知られるようになったが、1862年には、警察の弾圧に対する進歩派の教授や学生の抗議を支持することを拒絶し、大学から出ることを余儀なくされた。またコストマーロフは、ウクライナ史の研究や、古文書編纂委員会の仕事に参加しており、1861年から84年、全12巻からなるウクライナとベラルーシの歴史に関する『文書集』(Акты)を刊行した。[КЛЭ 3: 771] [3] ニコライ・クーロチュキン(Николай Степанович Курочкин, 1830-1884)、ロシアの詩人、ジャーナリスト、社会活動家。革命運動に積極的に参加した。1861年から結社「土地と意志」の一員に加わる。友人にゲルトツェンやバクーニンなどがいる。弟のヴァシーリー(1831-1875)は1859年から73年にかけて風刺雑誌「火花」(Искра)の編集を務めていた。[КЛЭ 3: 922-923] [4] フェオクテリス・ホルタハイ(Феокист Авраамович Хартахай = Феокист Авраамович Хартахай, 1836-1880)、ウクライナの詩人、文学者、教育学者。[ШЕ 6: 591] [5] ホロコフスキ(Владислав Юліанович Хорошевський, 1835-1900)。詳細は不明。[ШЕ 6: 637] [6] ペロゼールスキー。[7] アレクサンドル・アフアナーシエフ=チュジュピンスキー(Александр Степанович Афанасьев-Чужбинский = Олександр Степанович Афанасьєв-Чужбинський, 1817-1875)、ロシア語およびウクライナ語の作家、民俗学者。その文学的スケッチ(オーチェルク)『騎兵少尉の生活より』(Из кавалерийской жизни, 1861)の素材は、レフ・トルストイ(Лев Николаевич Толстой, 1828-

た。それらの甲辞のおおよその内容を提示することは簡単だが、それらについて長々と話すことが必要とは思わない。なぜなら、それらを速記することはまったく不可能だったからであり、手短かに述べることは、それらを損なうことになるからだ。言えるとすれば、聞き手の魂にとりわけ強烈に響いたのが、愛すべき我ががコストマーロフ博士とクローチキン氏の、涙をこらえるあまり詰まりながら読み上げられた[甲いの]言葉であったということぐらいだ。その手短な言葉には、心をこめた銜いのなさと誠実さが息づいていた。シェフチェンコの墓は、墓地教会の鐘楼の裏の、水辺に掘られた。しばらくは、彼はスモレンスク墓地の一番端の住人である。²⁴ また、彼の墳墓の向こうには白い雪の平原が広がっていた。まるでそれは、シェフチェンコが[主題として]歌い、「小さな足で」距離を測った広いステップ²⁵を、かすかに思わせるようなものだった。真ん中に鉛を敷き詰めた、板づくりの箱が墓に下された。しかし底面のはんだ付けがあまりにもまずかったため、棺が墓地に送り届けられたときには、箱の底には水がたまっていた。丸二日たったあとでも、詩人の顔は驚くほどに端正なままだった。巨大な月桂冠が、気品ある額を取り囲んでいた。多くの人の手に花輪があった。詩人の建てたばかりの墓に手向けるために、彼らが持参したものである。[告別式]来ていた婦人たちはごくわずかだったが、それでもペロゼールスカヤ氏やコストマーロヴァ老婦人²⁶の目からこぼれる女性の涙は、シェフチェンコの墓を避けて通らなかった。詩人シェフチェンコを愛し、彼の苦難に満ちた生涯のうち最も過酷な瞬間においてさえ、彼のことを気遣ったトルストイ一家²⁷の姿は

1910)によって短編『舞踏会の後で』(После бала, 1903)にも使用された。シェフチェンコと知り合いであり、1861年には回想録を残している。ウクライナ語の辞書も作成したが、未完に終わっている。いくつかの雑誌の編集に携わったが、その中には、上述の『火花』(1873)も含まれていた。[КПЭ 1: 360] [8] タヴォルガ=モクリツキー(П. Н. Таволга-Мокрицкий, 生没年等の詳細は不明)。以上の通り、概してウクライナと縁があり、シェフチェンコと面識のある知識人たちの甲辞だったといえる。

²⁴ シェフチェンコの遺体は、1861年5月にウクライナに移され、旧暦5月10日にカニウ(カニエフ)近郊の、ドニプロ(ドニエプル)河を見下ろす丘に埋葬された。この丘は「修道僧の丘」(Чернецья гора)、あるいは「タラスの丘」(Тарасова гора)と呼ばれている。[10: 486]

²⁵ 藤井悦子の解題によれば、シェフチェンコは1859年6月末にウクライナの故郷を訪れているが、その目的は「自分の住む家を建てるために準備した土地を測量することであった」。(藤井 326)本文中でレスコフが述べている「ステップ」での測量は、この出来事を念頭に置いていると思われる。

²⁶ ナデージダ・ペロゼールスカヤ(Надежда Александровна Белозерская = Надія Олександрівна Белозерська, 1838-1912)、前述のペロゼールスキーの妻。[10: 486] 翻訳者、教育学者、歴史学者、ジャーナリストとして活躍。1858年にシェフチェンコと知り合い、夫と共に毎週日曜日に開催した文学者仲間集いの場などで、顔を合わせた。この集いの場には、シェフチェンコ、他、本稿で言及されたコストマーロフやクリーシユ、また作家のイヴァン・トルゲーネフ(Иван Сергеевич Тургенев, 1818-1883)や文芸批評家バヴエル・アンネンコフ(Павел Васильевич Анненков, 1812-1887)、歴史学者コンスタンチン・カヴェーリン(Константин Дмитриевич Кавелин, 1818-1885)、チェルヌイシェフスキーなども参加した。[ПШЕ 1: 434] タチヤーナ・コストマーロヴァ(Татьяна Петровна Костомарова)、前述のコストマーロフの母。[10: 486] 藤井によれば、シェフチェンコは1857年6月12日に兵役免除されると、カスピ海近くのアストラハンを出発し、ペテルブルグへと向かう。その道中、サラトフに停泊した際、シェフチェンコは彼女のもとを訪ねており、二人の間で直接の交流があったことがうかがえる。[藤井 323] 上述の二人の女性は、いずれもシェフチェンコと親交を持っていた人物といってよい。レスコフの追悼文によれば、彼女たちは、概して女性(婦人)の参加者が少ない中、シェフチェンコとの最後の別れの場に立ち会い、涙を流して哀悼の意を示したのである。

²⁷ フョードル・トルストイ(Федор Петрович Толстой, 1783-1873)の一家のこと。トルストイは、芸術アカデミーの副総

なく、そのことをひどく残念に思う者は多かった。

棺を納めた箱の蓋がはんだで接合されると、故人を見送りに来た群衆も解散し始めた。かなり大きな綿雪が降り始めた。手に書類鞆を持った紳士が故人シェフチェンコを描いたりトグラフの肖像画を差し出しながら、通行人の間をせかせかと動き回っていた。養老院から来た老婆たちは魂の冥福を願ってすすり泣いていた。沈鬱な気持ちがさらにいっそう増していった。ロシアがホミャコフを、アクサーコフを埋葬したのは、もう昔のことだったろうか。²⁸ そして見よ、再び新しい墓が建つのだ。生涯をかけて誠実に思索を巡らせ、2,300万人の解放前夜²⁹に死を迎えた者が、また一人いなくなってしまう。その[2,300万もの]人々の中には、詩人にとって血を分けたも同然の、隣人のように大切な人たちが、今の今まで[農奴として]残っていた。

もともと、[亡くなったとはいえ、]シェフチェンコの詩人としての活動は、小ロシアの文芸(словесность)の最良のページに残り続けるであろうし、同様に、彼を埋葬するまさにこの日も、ウクライナの文学(письменность)と市民意識の歴史の中で、永遠に重大なものとして残り続けるであろう。詩人が何より愛を持ってはぐくんだ[農奴制廃止という]夢想は現実のものとなり、高らかにその存在を主張した。小ロシアの言葉は、はじめにシェフチェンコの棺に寄せる雄弁家のスピーチという形をとって響き渡ったのち、市民権を獲得した。詩人の墓の上で語られた9つのはなむけのスピーチのうち、6つは小ロシア語で読み上げられた。残りの3つのスピーチのうち、2つはロシア語で、残り1つはポーランド語で読み上げられた。小ロシアの詩人であり受難者に、最後の別れを告げるべくやってきたスラヴ人たちの、共通の悲しみを表しているかのようなだった。

ありがたいことに、小ロシアの民衆には、いまや自分たちの文学があり、自分たちの雄弁家があり、自分たちの歴史家がいる。けれどもそこには、棺に寄せられた弔辞の一つで正しくも「パーティコ・リードヴォホ・スローヴァ[祖国の言葉の父]」と呼ばれた、故タラス・グリゴリーエヴィチ・シェフチェンコのようなリラ[竖琴]の名手³⁰はいまやいない。Oratores fiunt, poetae nascuntur[雄弁家は成るもの、詩人は生まれるもの]であった。

長であり、妻とともにシェフチェンコの流刑解除、またその後の生活の立て直しに尽力した。1857年6月13日、シェフチェンコは日記の中で次のように書いていた。「ただ彼らこそが、私を窮地から救い出した張本人(виновники)。彼らに対し、最大級のお辞儀を」。[10: 486]

²⁸ アレクセイ・ホミャコフ(Алексей Степанович Хомяков, 1804-1860)とコンスタンチン・アクサーコフ(Константин Сергеевич Аксаков, 1817-1860)は、ともにスラヴ派として知られている知識人。前者は1860年11月23日に、後者は1860年12月7日に、それぞれ亡くなっている。[10: 486]

²⁹ 農奴解放令(農奴の人格的解放の宣言)を指している。アレクサンドル2世の治世下、2月19日に本法令が成立した(ただし公布は3月7日)が、その7日後の2月26日にシェフチェンコは死去している。[藤井 327]

³⁰ 訳文中の「リラ[竖琴]の名手」は、原文では「抒情詩人」(лирик)となっている。これは訳文の冒頭「小ロシアの竖琴[リラ](лира)は孤児となった」に対応する表現と考えられる。拙訳はこの点を念頭に置いたものである。

【2. 略年譜】

2.1. シェフチェンコ略年譜³¹

- 1814年 2月 25日 生誕(キエフ県)
- 1831年 1月 領主に連れられてペテルブルグに行き、画家に徒弟奉公に出される [16歳]
- 1838年 4月 農奴身分から解放、芸術アカデミーに入学 [24歳]
- 1840年 詩集『コプザール』出版 [26歳ごろ]
- 1841年 長編叙事詩『ハイダマキ』出版 [27歳ごろ]
- 1843年 ウクライナへ旅行 (1回目) [29歳ごろ]
- 1844年 1月 ベテルブルグへ帰還 [29歳]
- 1845年 3月 芸術アカデミー卒業
詩集『三年』出版 [31歳ごろ]
ウクライナへ旅行 (2回目)
- 1846年 2月 秘密結社「キリロ・メフォディウス同胞団」のメンバーと知り合う [32歳ごろ]
- 1847年 春 結社との関わりを理由に逮捕、ペテルブルグの監獄に収容 [33歳ごろ]
⇒詩集『三年』の内容が反逆的(不敬罪)であるとして流刑
⇒オレンブルグ独立大隊の一兵卒となるほか、「書くことと描くこと」を禁じられる
- 1850年 3月 再逮捕 (禁止されていた執筆や詩作、描画を密かに行ったため) [36歳]
- 1857年 兵役免除の決定が下る [43歳ごろ]
- 1858年 3月 ペテルブルグへ帰還 [44歳]
- 1859年 6月 9月までウクライナ旅行 (3回目) [45歳]
- 1861年 1月 レスコフと面会 [46歳]
- 2月 19日 *農奴解放令の成立
26日 死去 [47歳]

³¹ 作成にあたり、[藤井 300-337]を参照した。年月日の表記は旧暦に基づく。

2. 2. レスコフ略年譜³²

- 1831年 2月 4日 生誕(オリョール県ゴロホヴォ村)
- 1847年 6月 オリョール裁判所の事務員として勤め始める [16歳]
- 1848年 この頃、ウクライナの民俗学者マルコーヴィチと交流を持つ [17歳ごろ]
- 1850年頃 キエフの母方の伯父のもとに寄宿、キエフ税務局で勤め始める [18-19歳]
- 1857年 5月 休職、ペンザ県ライスコエ村へ移る [26歳]
⇒「スコット・アンド・ウィルキンス商会」で勤務、以後ロシア各地を巡る
- 10月 キエフ税務局を辞職
- 1860年 5月 キエフに帰還 [29歳]
- 9月 (11月まで)キエフの知事官房のもとで勤務
- 1861年 1月末 ベテルブルグに移る、³³ シェフチェンコを訪問 [29歳]
- 2月 19日 *農奴解放令の成立 [30歳]
26日 シェフチェンコの訃報を聞く
27日 告別式に参列
28日 葬式に参列
- 3月 9日 小文「シェフチェンコとの最後の出会い、最後の別れ」発表
- 1880年 6月 (8月中旬まで)キエフおよびカニェフへ旅行 [49歳]
- 1882年 11月 1日 小文「タラスの墓は忘れられたか？」発表 [51歳]
- 1895年 2月 21日 死去 [64歳]

³² 年譜の作成にあたり、主に以下を参照した。福岡星児編「レスコフ年譜」『世界文学大系 30: ゴンチャロフ、レスコフ』筑摩書房、1959年、482-492頁、また *Кучерская М. Лесков: прозванный гений. М.: Молодая гвардия, 2021. С. 591-606.* 年月日の表記は旧暦に基づく。

³³ 既に岩浅らが指摘している通り、レスコフが1861年のベテルブルグへ移住した背景には、1860年10月6日の『現代医学』(Современная медицина)紙に掲載された同氏の論文「ロシアの警察医について数言」(Несколько слов в полицейских врачах в России)をめぐる一連の事件が関係していた。レスコフは、「フレイシッツ」(Фрейшиц)のペンネームで執筆したこの論文で、警察医の取賄行為を摘発した。この論文にはロシアの内務省も反応し、キエフ当局に事実調査を命じた。一方、当事者たる官憲勢力も関与し、圧力をかけて事態の隠蔽を図った。その過程で、「レスコフの取賄行為」が捏造されたが、これに対しレスコフは一貫して無実を主張した。最終的にレスコフは、1861年1月19日にキエフ当局へ釈明文書を書き送り、その後まもなくキエフを離れた。これにより警察医論文をめぐる一件は、落ち着いた。詳しくは、岩浅「レスコフの初期社会評論」、54-57頁、また *Левандовский Л. И. О жизни Лескова в Киеве в 1860-1861 годах: по документам Центрального государственного исторического архива Украины // Литературное наследство. Том 101 в 2 книгах. Незиданный Лесков. Кн. 2 / Отв. ред. К. П. Богаевская и др. М.: ИМЛИ РАН, 2000. С. 295-321* を参照されたい。ウクライナのレスコフ研究者レヴァンドフスキーによれば、レスコフがベテルブルグに移った時期については、「1860年12月末」や「1861年1月初旬」など、いくつかの説があり、意見の一致を見ていなかった。それに対して氏は、ウクライナ中央国立歴史文書館に所蔵された資料等を考慮に入れることで、「[レスコフが]キエフを発ったのは1861年1月末のことだった」という結論が得られると述べる。これは、レスコフの追悼文中の記述(「1月末に北方のパルミラへと戻るや[...]」)とも(移動にかかる日数などを誤差とすおぼ)ほぼ一致している。

【3. 解題】

3.1. はじめに

2022 年春以降、ウクライナの歴史・政治・文化に関心が寄せられるようになった。³⁴ このような流れの中で、ウクライナ出身の詩人シェフチェンコにも注目が集まっている。シェフチェンコはキエフ県の農奴の両親のもとに生まれた。当時の領主と共にペテルブルグへ移ると、彼の才能が首都の画家たちに認められる。彼らの尽力により自由身分となり、芸術アカデミーへ入学した。以後数年、絵画を学びつつ、同時にウクライナ語による詩作も行った。詩集『コブザール』(Кобзарь, 1840)、長編叙事詩『ハイダマキ』(Гайдамаки, 1841)などを発表し、18 世紀半ばから続く近代ウクライナ語の確立に貢献した、というのが定説のようである。[藤井 304-310]

彼の詩を多年に渡り精力的に翻訳してきた藤井悦子³⁵ は、その編訳『コブザール』の解説で次のように述べている。「[筆者注:シェフチェンコの]葬儀には友人たちの他、大学生、美術アカデミーの学生、ロシアの著名な作家たちが大勢参列した。亡くなる前年にペテルブルグの文学のタペではじめて顔を合わせたフォードル・ドストエフスキ、『デカプリストの妻たち』の作者ニコライ・ネクラーフ、サルトウイコフ・シチェドリン、アレクサンドル・プイピン³⁶ からもシェフチェンコとの別れを惜しんだ」。[藤井 327-328]「ロシアの著名な作家たち」の具体例として、ここで言及こそされていないものの、やほりのちにその一人として数えられることとなるレスコフもまた、紛れもなく「シェフチェンコとの別れを惜しんだ」一人であった。

訳出を試みたレスコフの小文「シェフチェンコとの最後の出会い、最後の別れ」は、1861 年 3 月 9 日に、新聞『ロシアの言葉』(Русская речь)第 19-20 号において発表された。シェフチェンコが亡くなった直後に発表されたこの文章は、内容の点からいっても、明らかに詩人の死を悼むものである。そのため、本稿ではこの小文を追悼文と呼ぶ。一般にレスコフは、「最もロシア的な作家」(マクシム・ゴーリキー)、あるいは「物語作家」(ヴァルター・ベンヤミン)といった文句と共に知られる散文作家だが、1861 年当時のレスコフは、作家というよりも、むしろ駆け出しの社会評論家であった。この追悼文は、彼の評論家(あるいは文筆家)としてのキャリアの最初期に書かれた文章である。

シェフチェンコについて知ろうと考えるとき、まず着眼すべきは彼の詩そのものであろう。他方、シェフチェンコその人が、ウクライナ語文化圏にのみ留まったのではなく、ロシア文学・文化の担い

³⁴ 例えば『現代思想 6 月臨時創刊号』50 巻 6 号、2022 年。本号は「ウクライナから問う:歴史・政治・文化」と題する総特集を組んでいる。

³⁵ 藤井の訳書には、本稿「はじめに」で挙げた『シェフチェンコ詩集 コブザール』のほか、『マリア』(群像社、2009 年)や対訳形式の『シェフチェンコ詩選』(大学書林、1993 年)などがある。

³⁶ ドストエフスキー(Федор Михайлович Достоевский, 1821-1881)、サルトウイコフ=シチェドリン(Михаил Евграфович Салтыков-Щедрин, 1826-1889)はいずれも 19 世紀のロシアで活躍した作家。プイピン(Александр Николаевич Пыпин, 1833-1904)はロシア文学者で、その著作は文学史、社会思想史、民俗誌、フォークロアに関するものなど、多岐に渡る。

手たちと交流していた事実もまた、見落とされるべきではない。³⁷ 今回レスコフによる追悼文を翻訳したのは、シェフチェンコを取り巻く文学・文化環境の一端を知るための素材を提供したかったからである。本翻訳を通じて、シェフチェンコの死の直前の様子、そして当時はまだ駆け出しの文筆家に過ぎなかったレスコフが、ウクライナ語で書くこの詩人の死をどのように回想していたのかを、それぞれ具体的に知ることが可能となれば、さしあたり目的は達成されたことになるだろう。

3.2. レスコフがシェフチェンコを知るまで

レスコフは、1831年にオリョール県(ロシア中南部)で生まれ、青年期までこの周辺で暮らしていた。1841年11月(当時10歳)、オリョール県のギムナジウムに入学するも、1846年8月(15歳)に進級試験に落第して退学し、以降も正規の学生として大学で学ぶこともなかった。機関や制度に即した教育との縁はさほどなかったようである。

レスコフは1861年(30歳)から本格的な文筆活動を開始するのだが、そこに至るまでの彼の知的基盤にはウクライナ/キエフ(キーウ)の知識人が少なからず関わっていた。例えば1848年、レスコフはオリョールでウクライナの民俗学者マルコーヴィチ(Афанасий Васильевич Маркович, 1822-1867)と知り合った。マルコーヴィチは、秘密結社「キリロ・メフォディウス同胞団」に関与したとみなされ、オリョールへの流刑が科されたために、この地に来ていたのである。この結社は、ウクライナ出身の母親を持つ作家コストマーロフらによって組織され、スラヴ人全体の連合、農奴制の根絶、大衆における教育の普及を目的としていた。コストマーロフがシェフチェンコにこの計画を伝えたところ、シェフチェンコはこの活動に興味を覚え、結社のメンバーに接近した。[БД 44]³⁸ もっとも、1847年になると、結社はロシア政府の弾圧を受けた。組織したコストマーロフをはじめ、シェフチェンコを含む関係者全12名が逮捕され、取り調べが行われた。シェフチェンコに関していえば、結社の首謀者としての証拠こそ見つからなかったものの、手書きの詩集『三年』(Три літа, 1843-1845 執筆)のうち幾編かの詩の内容が反逆的であったことが問題視され、結果、有罪となった。罪状の一つは、「ウクライナの過去の栄光の歴史を現在の悲惨な状況と対比させることによって「反ロシア」的感情

³⁷ 例えば、中学・高校教諭を勤める(2018年時点)かたわら、ウクライナ研究を行う井口靖は、詩人ネクラソフや画家イリヤールレーピン(Илья Ефимович Репин, 1844-1930)がシェフチェンコに関心を寄せていたことを示す事例に触れた上で、これらの例は「19世紀ロシア帝国で、シェフチェンコが『ウクライナ民族だけの詩人』でなかったことを示唆している」と述べている。本稿の翻訳もまた、井口の言うように、「同時代であれ、1世紀以上前の歴史であれ、人々が暮らした空間での具体的な交流を知る」ことの必要性を念頭に置いたものである。井口靖「レーピン 絵画の中のシェフチェンコ:ウクライナに共感したロシア知識人たち」、服部倫卓、原田義也編『ウクライナを知るための65章』明石書店、2018年、212-214頁。なお、井口はこのコラムの中でレスコフの追悼文にも言及している。

³⁸ なお、同胞団のメンバーの立場は必ずしも一貫してなかったようである。ペレツキーとデイチによれば、コストマーロフとクリージュは、革命的な動きを恐れ、平和的な変革を求めたのに対し、他のメンバーは農民解放のためには武力も辞さないという姿勢であった。熱のこもった言葉で読まれたシェフチェンコの革命を志向する詩は、後者の立場の者たちを鼓舞したという。[БД 44]

を煽った」こと、もう一つは「夢」という長編叙事詩の中でツァーリと皇后を戯画化して描写し侮辱した「不敬の罪」を犯したことである。こうしてシェフチェンコは、マルコーヴィチと同様、流刑を科され、オレンブルグへと向かうことになった。[藤井 317-318]

話を戻そう。民俗学者マルコーヴィチにとっては、あるいは不遇の時期だったかもしれないが、翻ってレスコフにとっては興味深い知識人と知る好機となった。近年、ロシアの著名な人物の生涯や文化的達成を伝える『偉人伝シリーズ』の一つとして、レスコフを主題とする巻が刊行された。その著者クチェルスカヤによれば、レスコフはマルコーヴィチを通じて「同胞団」のことを、またこれに関与してオレンブルグへの流刑を課された詩人シェフチェンコを知った可能性が高い。³⁹ 翌1849年末から50年ごろ、レスコフはキエフにいる伯父のもとに身を寄せ、さらにこの地で職を得る。伯父はキエフ大学医学部教授であり、彼の邸宅には多くの知識人が来訪した。レスコフは彼らの知遇を得、学問を身に着けていった。

レスコフとシェフチェンコが初めて出会ったのはいつなのか、管見の限り、確定はしていないようである。前述のクチェルスカヤは、二人はキエフで出会った可能性があると述べているが、⁴⁰ レスコフがキエフにいたほとんどの期間、詩人はこの地を離れ、流刑を課されていた。どちらかというと、シェフチェンコが流刑を終え、ペテルブルグに戻った1858年から1860年のどこかで、レスコフが首都を訪問し、その折に詩人と出会ったと考える方が蓋然性は高いように思われる。実際、『レスコフ 30 巻全集』の注釈ではそのような説が紹介されており、「レスコフはキエフ[在住の]時代に、「タラス」のことを親しく知っている新たな人物と知り合った」が、二人が直接知り合ったのは、おそらく「1859年の末に、レスコフが商會員の仕事でペテルブルグに着いたあと」、「流刑から戻ってきたばかりのシェフチェンコをたずねた」際だと記されている。[ПССЛ I: 716] いずれにせよ、両者が直接交流を重ねた回数は、さほど多くなかっただろうが、そのわずかな交流の中で互いへの尊敬と友情を育てていったようである。

追悼文の中でレスコフは、詩人の死の知らせを「雷鳴の一撃のようだった」と述べている。彼の死期が近いことは薄々察していたであろうが、これほどに早く亡くなるとは予想していなかったのかもしれない。この一文は、得がたい友を失ったレスコフの衝撃と悲哀を伝えている。

3.3. 追悼文について

訳出した文章は、論理的一貫性を持つ文章ではなく、印象や断片的な記憶をもとに構成され、また状況への依存度も高いため、多少の読みにくさはあるかもしれないが、内容自体はさほど複雑なものではない。あえて整理するなら、この追悼文はおよそ以下の要素から構成されている。(1)レ

³⁹ Кучерская. Лесков. С. 54, 114.

⁴⁰ Кучерская. Лесков. С. 114.

スコフが最後に訪問した際のシェフチェンコの様子、彼の邸宅の様子。また彼と交わした会話の内容。(2)シェフチェンコの葬式の日の様子。(3)文化・文学史におけるシェフチェンコの意義。それぞれ、追悼文の前半・後半・冒頭および末尾の記述に相当する。

上記(3)について少し詳しく見ておこう。まず冒頭でレスコフは、具体的なことについては「私からは語るまい」としつつも、シェフチェンコの「喪失」が「小ロシア文学にとり、いかに大きなものだったのか」を読者に想起させている。また末尾でも「シェフチェンコの詩人としての活動は、小ロシアの文芸の最良のページに残り続けるであろうし、同様に、彼を埋葬するまさにこの日も、ウクライナの文学と市民意識の歴史の中で、永遠に重大なものとして残り続けるであろう」と述べる。シェフチェンコが「小ロシア文学」の確立、そして「ウクライナ人」としての意識の確立に貢献したことを、レスコフは指摘している。

同時にレスコフは、シェフチェンコと彼の詩が、ロシアも含む「スラヴ民族」全体にとって共通の文学的価値を持つとも認識していた。冒頭のレスコフの言葉（「シェフチェンコの意義については、血を分けたスラヴの言葉を愛し、何か高次のもの、優れたものに触れてこられた者たちなら、誰でも知っている」）は、それを端的に示している。また追悼文の末尾では、シェフチェンコを埋葬する際に、ウクライナ語のみならず、ロシア語とポーランド語で弔辞が読まれたことを想起しながら、「小ロシアの詩人であり受難者に、最後の別れを告げるべくやってきたスラヴ人たちの、共通の悲しみを表しているかのようなだった」と語っている。レスコフは、ウクライナにとってのシェフチェンコの意義や重要性を認めた上で、それらが同時にウクライナという枠を超えてなお価値を持つと考えていた。

本追悼文は、概してシェフチェンコが辿った過酷な来歴への言及が希薄である。⁴¹ 反面、シェフチェンコの告別式や葬式の様子を克明に描くことで、詩人がウクライナ/ロシア/ポーランドにもたらした文学的・文化的意義が浮き彫りにされている。

3.4. レスコフはシェフチェンコから影響を受けたか？

以上のような追悼文を書いたレスコフが、シェフチェンコに対して好感を覚えていたことはほぼ間違いない。では、レスコフはこの詩人から、創作や世界観の点で何か影響を受けたのだろうか。この点を考察した研究等は少ないようだが、⁴² 例えば 19 世紀ロシア文学者のグロスマンは、レス

⁴¹ なお、シェフチェンコの死に際して、詩人ネクラースフも「シェフチェンコの死に寄せて」（На смерть Шевченко）と題する詩を書いている。この詩は 1861 年 2 月 27 日付となっているが、生前には検閲により発表されなかった。詩と散文では構成原理が異なるため、単純な比較は難しいが、上記の詩は、「流刑」（第 1 連）や「オレンブルグのステップ」（第 2 連）などを体験した、シェフチェンコの過酷な生涯に焦点を当てており、全体を通じて運命（第 3 連「いたずらな天の摂理」）に翻弄される「受難者」としてのシェフチェンコ像を描き出すものとなっている。Некрасов Н. А. Полное собрание сочинений и писем в 15 томах: художественные произведения, тома 1-10. Т. 2. Л.: Наука, 1981.

⁴² 111, 377. 本稿末に、当該のネクラースフの詩の全訳を掲載しているので、適宜参照されたい。

⁴² 関連する研究として、レスコフの文学作品における「ウクライナ」のテーマに着目したものがあ。Крюкова О. С.

コフを取り上げたモノグラフの中で、全スラヴ人の連帯という、シェフチェンコも共感した「キリロ・メフォディウス同胞団」の理念が、レスコフにとっても親和的なものであり、これが「レスコフの主たる政治的夢想として長いこと残り続けた」と述べ、さらに「偉大なウクライナ詩人に関する 1861 年の彼 [レスコフ] の追悼文は、スラヴ人の共同連合体 (общие содружество славян) という理念に対する、彼の心からの共感を証明している」と言う。⁴³ 残念ながら、現段階でグロスマンの見解の妥当性を判断する用意は私にはない。

言えるとすれば、レスコフがおそらく生涯にわたってシェフチェンコへの関心を持ち続けていたということである。レスコフは 1861 年以降、基本的にはペテルブルグを生活の拠点としていたが、80 年にウクライナ旅行へ出かけ、キエフとカニエフ(カニウ)を訪れている。この時の見聞と実感をもとに、レスコフは 82 年に小文「タラスの墓は忘れられたか？」(Забыта ли Тарасова могила?) を発表した。そこでは、およそ以下のようなことが述べられている。1861 年 5 月にカニエフへ移されたシェフチェンコの墓は、いまや老朽化しているが、それは現地のナロードの憩いの場として親しまれているからであり、忘れ去られたからでは決してない。「タラスの墓」を柵で囲み保護すべきとの案も出ているようだが、そのようなことはすべきではない。「タラスの墓」は人々に開かれておくべきである。[11: 30-33] このようにレスコフは、80 年代のウクライナ旅行を通じて得た実感をもとに、ウクライナの民衆に親しまれているシェフチェンコ像を提示しながら、「タラスの墓」にまつわる自説を展開している。

3.5. おわりに

シェフチェンコはウクライナ語で詩作し、ウクライナを心から愛し、ウクライナ人の地位向上を強く志向した。国民文学の枠組みから見れば、彼がウクライナ文学史において重要な位置を占めていることは疑いを容れない。ただしそれは、詩人がウクライナ文学史においてのみ、あるいはウクライナ人にとってのみ重要な存在であるということの意味しない。だからといって、シェフチェンコをロシア文学・文化の領域に回収して捉えるべきだということでもない。そうではなくて、「ウクライナか、さもなければロシアか」という、明快に過ぎる二項対立的な発想を無効化する一つの文化的現象として、「シェフチェンコ」という詩人を捉えなおしてみようという道が残されていると思うのである。レスコフの追悼文は、そのような道の存在を示唆している。

(ふかたき ゆうた)

Романтический образ Украины в русской литературе XIX века. М.: Наука, 2017. С. 53-62. ただし、レスコフがシェフチェンコから受けた影響、あるいは両者の関係についての言及は見当たらない。

⁴³ Гроссман Л. Пушкин. Достоевский. Лесков. М.: Изд-во Альфа-Книга, 2018. С. 888.

【4. 付録】

4. 1. プレンチューエフ「下男と女中」(Слуга и служанка)全訳⁴⁴

ボール遊びを、孤児は決してやらなかった、
彼自身が小さなボールで、運命がこれをもてあそんだ、
彼は血を付けた雛たちから小鳥を捕らえることはせず、
小鳥のように、なんでも手に入ったもので腹を満たしていた。

В мяч — сирота не играл никогда, —
Сам он был мячик — судьба им играла,
Птичек не брал из родного гнезда, —
Сам он, как птица, был сыт, чем попало.

夜明けを迎える前に起きると、彼は水、薪を一日中運び、
階段をよじ登った。
腹を満たした犬に、
暖かい毛皮をまとった猫に、羨望の念を抱いた。

Воду, дрова, целый день он таскал,
Лазил по лестницам, вставши до света.
К сытой собаке он зависть питал,
К кошке, что тёплого шкурой одета.

成長し、従僕として雇われたのち、
自分の貧しさを、制服の金モールで隠した。
馬に鞍を置き、犬に餌をやって、
絶えず主人の計画を実現していた。

Вырос, и в слуги нанявшись, прикрыл
Бедность свою — галунами ливреи.
Лошадь седлал, и собаку кормил, —
Все исполнял господина завет.

彼はしばしば自分の愛する人のことを考えた。
愛する人はきれいな服を着ていて、
持っていたピロードのようではないその手で、
彼女は床を拭き、下着を洗っていた。

Думал он часто о милой своей.
Милая — грубое платье носила
Не были руки — как бархат у ней, —
Ими полы и белье она мыла,

彼は彼女のために窓の下でセレナードを歌わず、
友のために歌った。彼女は肖像画を与えなかった。
会うことはめったになく、……のちに離れはばなれになった、
情熱の、力の、完全な開花を迎えたその時に。

Он ей не пел серенад под окном,
Другу — портрета она не дарила.
Виделись редко… расстались потом —
В полном расцвете и страсти и силы.

⁴⁴ Плещеев А. Слуга и служанка // Стихотворения А. Н. Плещеева. М.: Типография В. Грачева и Комп, 1861. С. 78-80.

やがて彼らは年を重ねた……。だが彼らの心は、
絶えず希望が潮脈を打ち続けていた……。
野の花をどれだけ摘み取ろうとも、
それでも草むらに、一輪ぐらい隠れているはずだ！

時おり彼らの誠実な魂は夢を見た、
もはや自分たちが仕えるのを止めたかのような夢を。
あたかも同等の大主人を相手にするときのように、
顔を合わせたときに互いに手を差し出すような夢を。

さあついに、財産を蓄えたのち、
共に生活し始めた。満ち足りた、幸福な気分だった……。
彼女は紡ぎ車を持っている。亜麻もそれなりにある。
彼の方はきれいな小屋を建てた。

死のような静寂の中、彼らの日々は流れた。
愛の法悦は魂を苦しめなかったが……
その全ては無くなった！ 別離の中、
情熱の、力の、この上ない歳月が過ぎ去った。

その戯れは静かだ……その愛撫は弱々しい。
それは花——ただし雪の下の花である！
それは秋の季節の蝶であり、
踊り——ただし杖をついた不具者の踊りなのである。

彼らを楽しませるのは、愛の法悦ではない。
否！ 自分の家……新たな運命についての考えなのだ。
彼らの君主はただ、鎖を打ち破った者に
愛のまなざしを向ける、主だけである……。

И постарели... Но сердце у них
Всё продолжало надеждою биться...
Сколько б ни рвали цветов полевых —
Всё же в траве — хоть один притаится!

Снилось порою их честным душам,
Будто они уж служить перестали.
Будто как равным, большим господам
Руку при встрече они подавали.

Вот наконец, сколотивши казну,
Зажили вместе; довольны, счастливы...
Есть у неё прялка, не мало и льну;
Он себе домик построил красивый

В мёртвом запишье их дни потекли.
Душу блаженство любви не томило...
Всё это стигло! В разлуке прошли
Лучшие годы и страсти и силы!

Тихи их шутки... их ласки робки.
Это цветы — но цветы под снегами!
Это осенней поры — мотыльки; —
Пляска — но пляска калек — с костылями.

Их не блаженство любви веселит:
Нет! Но свой дом... мысль об участи новой. —
Их властелин — лишь Господь, что глядит
Взором любви — на порвавших оковы...

4. 2. ネクラーフ「シェフチェンコの死に寄せて」(На смерть Шевченко)全訳⁴⁵

独特のやるせなさに身を委ねるな：

予見できた、ほとんど望ましい出来事[とはいえ]。

神の御慈悲のゆえに、ずいぶん以前から

ロシアの大地の素晴らしい人間は

破滅に瀕している：苦勞は多いが、

情熱と、希望と、熱意にあふれた青春期、

勇ましいことば、無鉄砲な戦い、

それらに続く流刑の長い日々。

全てを彼は経験した：ペテルブルグの監獄、

照会、尋問、憲兵の厚情を、

全てを——広々と続くオレンブルグのステップを、

そしてその地の要塞を。貧苦の中、人知れず、

無学者一人ひとりに侮辱されながら、彼は

兵士となり、憐れな兵士たちと共に暮らしていたが、

当然、笞打ち刑を科されて死ぬ可能性もあり、

あるいは彼は、この希望を抱えながら暮らしていた。

だが、苦しみを短くしたいと思わない

いたずらな天の摂理は、ロシア人たちが

流刑された時期にあつて、彼を大事に守った。

彼の不幸な時は終わりを告げ、

青春初期から彼が出会うことのなかった全てが、

心やさしき慈悲なるものが、彼に微笑んだ。

ここに至り、神は彼を羨み、

生かす途切れた。

Не предавайтесь особой унылости:

Случай предвиденный, чуть не желательный.

Так погибает по божией милости

Русской земли человек замечательный

С давнего времени: молодость трудная,

Полная страсти, надежд, увлечения,

Смелые речи, борьба безрассудная,

Вслед за тем долгие дни заточения.

Всё он изведал: тюрьму петербургскую,

Справки, допросы, жандармов лобезности,

Всё - и раздольную степь Оренбургскую,

И ее крепость. В нужде, в неизвестности

Там, оскорбляемый каждым невеждою,

Жил он солдатом с солдатами жалкими,

Мог умереть он, конечно, под палками,

Может, и жил-то он этой надеждою.

Но, сократить не желая страдания,

Поберегло его в годы изгнания

Русских людей провиденье игривое.

Кончилось время его несчастливое,

Всё, чего с юности ранней не видывал,

Милое сердцу, ему улыбалось.

Тут ему бог позавидовал:

Жизнь оборвалась.

⁴⁵ Некрасов Н. А. Полное собрание сочинений и писем в 15 томах. Т. 2. С. 111, 377.

**Шевченко в глазах Лескова: к переводу статьи
«Последняя встреча и последняя разлука с Шевченко»
ФУКАТАКИ Юта**

С весны 2022 года заметно повысилось внимание публики к украинской истории, политике и культуре. Как часть этой тенденции, отмечается, в частности, интерес и более частое упоминание в публикациях имени поэта Тараса Григорьевича Шевченко (1814-1861). Фудзии Эцуко – специалист, долгие годы активно занимавшаяся переводом его стихов на японский язык, в начале своей статьи отмечает, как много людей присутствовало на похоронах украинского поэта: друзья, студенты Академии художеств, известные русские литераторы, такие как Ф. М. Достоевский, Н. А. Некрасов, М. Е. Салтыков-Щедрин и др. Среди прочих там был и оплакивавший поэта, Николай Семенович Лесков (1831-1895) – в те годы молодой писатель.

9 марта 1861 года, спустя около десяти дней после похорон, Лесков публикует в журнале «Русская речь» статью «Последняя встреча и последняя разлука с Шевченко». Ее содержание можно разделить на следующие части:

- 1) Как Шевченко выглядит, когда писатель встречается с ним в последний раз, интерьер его квартиры.
- 2) Подробности отпевания и похорон.
- 3) Значение творчества Шевченко.

По мнению Лескова, плоды творчества Шевченко «знаменательны» не только для «малороссийской словесности» и «истории украинской письменности и гражданственности», но и для славян вообще.

В целом два литератора встречались и общались нечасто. Считается, что Лесков впервые узнал о Шевченко от украинского фольклориста А. В. Марковича (1822-1867) в 1848 году, но, когда они встретились впервые и как часто общались, неизвестно.

При этом, как можно видеть из статьи, Лесков и Шевченко испытывали друг к другу чувство уважения. Статья описывает литературно-культурную среду, окружавшую украинского поэта, и дает читателю возможность подумать о вопросах культурных взаимосвязей между Украиной и Россией.